印度に於ける大乘佛說非佛說論

（大乘莊嚴經論成立大乘品の研究）

野澤靜證

（一）

印度に於ける大乘佛說非佛說論諍の跡をたどらんとする場合、漢譯資料に於いては、非佛說の主張は充分これを知ることが出來ぬ。唯佛說なることを辯護せる大乘莊嚴經論・顯揚聖教論・成唯識論等に於いて纔かにその片鱗を窺知し得る狀態にすぎない。これに反し西藏譯資料に於いては稍々明瞭にこれを知ることが出來る。卽ち、その資料とは瑜伽派に屬する安慧の①大乘莊嚴經論成立大乘品第一に對する釋疏と中觀派の淸辯の②中觀心論疏思擇焰第四聲聞眞實決擇章とである。而して前者は先づ非佛說の主張を一つ宛揚げて次にこれを駁するといふ形式を採り、後者は前分所破第二偈―一四偈までの十三偈に於いて非佛說の主張をまとめて擧げ、第一五偈以下の後分能破に於いてこれを破するといふ龍樹以來中觀派の論書によく用ひられる前指後證の論證方法を以てしてゐる。それ故に、これらによつて非佛說の主張の定型とも云ふべきものをほぼ推定し得る狀態にあるからである。

これらの非佛說主張中には中觀瑜伽と對立せざる以前の大乘に向けられた一般的なものと、對立以後各派に向けら

れた特殊なもの――例へば阿陀那識を說くによりて諸法無我印と相違するが故に、因果を損減するが故に、佛言ならずとする如き――とがあると考へられるが、今は暫く安慧と淸辯とに共通するものを一般的なものと措定し、然る後、かくして措定せられた非佛說主張の定型に對して安慧・淸辯が各自の立場からした反駁の仕方に、相違なきや否や等の點もこの二論の比較研究によつて解明せらるる筈である。尤も、淸辯②の聲聞眞實決擇章は西藏藏經の數へ方で約六〇葉の大部のものであり、安慧の釋疏は前者の約四分の一の十五葉にすぎないから、二論の比較のみによつては聲聞眞實決擇章の意は充分つくされない點が多々ある。今は大乘莊嚴經論成立大乘品の研究として安慧の釋論を中心とする範圍內での比較研究の結果についてのべ、その充分意のつくされない點は出來得る限り註として譯出し、詳しくは別な機會にゆづることとする。

註

① 北京版經疏部第四六函第一八葉A―第三三葉A。

② 頌は第一九函第一九葉A―第二二葉B。疏思擇焰は同じく第一九函第一五七葉B―第二一八葉B。

今少しくその構成を紹介すれば次の如し。

偈數は七四。但し、第三四・三五の兩偈は各五句一行偈、他はすべて常の如く四句一行偈。

さて、第一偈は發起偈、第二―一四偈は前分所破、第一五偈以下後分能破である。前分所破中、第二偈は、金剛喩定の後に心の十六刹那によりて解脫道を得る智の刹那を佛と稱するのであるから、大乘所說の三身を佛とするは不合理なりとす。第三―六偈に於いては、同じ八聖道を同じ仕方で修すと雖も三菩提の差別を生ずるのはその智の差別に據るとなし、それ故に、大乘に說く如き八聖道より何らか別な、この道より殊勝な菩提に到る道なしと論じてゐる。第七・八偈を以ては正しく大乘非佛說をのぶ。即ち、「(一)經等に攝せられざるが故に、(二)別な道を說くが故に、大乘は佛言にあらず。ヴェダーンタの見の如し。」「(三)斷見

の如く因果を損減するが故に、(四)十八部派内に屬せざるが故に、(佛言に)あらずと決定す。」と。疏思擇焰に於いては偈の四因の外に十種の因、即ち、(一)如來の常住と(二)如來藏の遍滿と阿陀那識と(三)佛は涅槃せずと說くが故に三法印と相違すること、(四)諸大聲聞の記別と諸阿羅漢に對する誹謗と在家に對する敬禮と如來よりも菩薩を讃嘆すること、(五)虛空藏菩薩等の諸願は名のみなること、(六)釋迦牟尼は變化身なりと說くこと、(七)常に入定すと說くこと、(八)效果なき讃嘆を說くこと、(九)業果なしと說くこと、(一〇)方等經別なるとクリキ王の夢(註⑤參照)の差別中に大乘の說かれざること、を擧げて佛言にあらずと難じてゐる。第九—一二偈に於いては大乘(中觀派)の無生說と不觀四諦說とを、第一三・一四偈を以ては唯心說(瑜伽派)を難じてゐる。

後分能破中、第一五偈は論端を起す偈、第一六—一九偈は第二偈を、第二〇—三一偈は第三—六偈を、第三二—五八偈は第七・八偈を、第五九—六八偈は第九—一二偈を破し、第六九—七三偈は第一三・一四偈を破してゐる。而して、この第六九—七三偈の所說は(前分所破のところで括孤して示せる如く、主として瑜伽派に對する難であるが)、中觀派の唯心說に對する見方をのべるものにして、次の第五章入瑜伽行眞實決擇章はこの所論を廣說せるものと考へらるる。最後の第七四偈は總結の偈である。

而して正しく非佛說を破する中、第三二偈は總破、第三三・三四偈は第(一)因、「經等に攝せられざるが故に」、第(四)因、「十八部派内に屬せざるが故に」を(疏の十因は第三四偈下の疏にて)、第三五—五五偈は第(二)因、「別な道を說くが故に」を、第五六偈は「ヴェダーンタの見の如し」の喩を、第五八偈は第(三)因、「斷見の如く因果を損減するが故に」を破してゐる。

尙ほ、この聲聞眞實決擇章の筆寫本を御惠贈下されし本多臣也氏、並にこの章の輪讀の機會を與へて種々御指導を賜はりし山口益先生・長尾雅人氏に謝意を表す。

二

安慧所釋の論本に近い③型態をもつ梵文大乘莊嚴經論成立大乘品の內容はともかく漢譯の如く緣起品と成宗品との二部に分けることが出來る。而してその成宗品に相當する第七偈より第二一偈までの十五偈は茲では便宜上第一部(前

七偈）と第二部（後八偈）とに分けて考察を進めることとする。

さて、その第一部に屬する七偈中劈頭の第七偈は八の因故を以て大乘佛說を論證せるのであるが、それに關する安慧の註釋を先づ揭げ、それによつて非佛說の主張の定型とも云ふべきものを導き出さう。

④茲に聲聞達は「この大乘は佛の所說なりと許さず。既に佛語にあらざれば大乘には三種の功德（大乘法に尊敬を生ぜしめんために第三・四・五偈の三偈を以て說かれた、斷障の因性・自在の因性・七聖財受用の因性）決してあり得べからず。」と徵難する故に、大乘は佛言なりと成立せんために、〔本文に〕「この大乘は決して佛言ならず。されば彼〔大乘〕にかくの如き功德如何にしてあらんや。とて茲に邪解する者あり。〔それ故に〕彼〔大乘〕の佛言たる義を成立せんために、その因故を分別することに關する偈あり。」と云ふ。

聲聞の徵難。聲聞の三藏は佛言なりと成立せらる。所以は諸の佛言には前所說の三種の功德あるが故なり。然るに、大乘の〔敎〕相は佛言相なる聲聞乘と異なる故に大乘は佛言ならず。卽ち、聲聞經中には蘊・界・處有りと說く。然るに、大乘中には一切法は實に空なりと說く。又、聲聞乘に於いては〔一切法は〕生滅の性質ありと說くに對して、大乘に於いては不生不滅なりと說く。更に又、聲聞乘に於いては見修所斷の煩惱を斷ずるとき涅槃すと說くに對して、大乘に於いては自性涅槃と說く。されば大乘はその〔敎〕相、佛言〔相なる聲聞乘〕と異なる故に決して佛言ならず。從つて彼〔大乘〕に三種の功德如何にしてあらんや、なしと邪執す。

かくの如く邪執する彼等〔聲聞〕に對して大乘は眞に佛言なりと成立せんために、佛言たることの因故を、八種に分別する一偈によりて顯示す。八種の因故とは、

初に記別せざる故に、同時に起れる故に、行境にあらざる故に、成就の故に、有と無なれば有無なる故に、對治の故に、聲の外なる故に。

(一)、若し、聲聞達曰はんか。卽ち、大乘といふこの法は、佛涅槃の後に正法を衰滅せしめんために無なりと說く般若波羅蜜等の法を增廣安立してそれを佛言なりと施設安立せるものなるを以て、大乘は佛言ならずと。

答へて曰く。初に記別せざる故にと。若し佛法衰へしために敎說擾亂せし際、或者が般若波羅蜜等〔の經〕を作つて〔それを〕佛言なりと施設すとせば、敎說擾亂の因は譬へばクリキ王⑤が夢に七種の夢を夢みたりと〔迦葉佛により〕記別せられたる如く、佛涅槃し給ふ以前に正法衰滅せる際、空なりと說く般若波羅蜜等の法興起し而もそれを佛言なりと語ると雖も、そは佛言にあらずして却つて敎說を滅せしむるものなり、と初に記別し給ふが道理なり。然るにかくの如き記別なき故に大乘は佛言なり。

(二)、若し聲聞達、舍衞城等に於いて世尊聲聞乘を說き給ひし時には大乘を說き給はず、佛涅槃の後に大乘といふ法興起せるを以て大乘は佛法ならず、と曰はば、

答へて曰く。同時に起れる故にと。世尊舍衞城等の場所に於いて劣乘を聲聞乘として說き給ひし時、それらの同じ場所にて大乘をも亦說き給ひしを以て大乘は佛言なりと成立せらる。

(三)、又聲聞達かくの如く思惟せん。卽ち、或る究理論者又は外道、自らの賢明さを成立し世間に稱揚せられんために般若波羅蜜等の多くの本典を作れる故に、他方、外道等の論書(āṛṣa)中にも亦布施・持戒・苦行を說く故に、この〔大乘〕は或る究理論者又は外道の所造なりと吾等は思ふと。

そは不合理なりと說くために、行境にあらざる故にと云ふ。彼等〔究理論者又は外道〕はすべて地・波羅蜜等の廣大甚深の相ある教說を悟了せざれば如何にして彼等の悟了の行境たり得んや、たり得ざるなり。更に外道等の論書中には地・波羅蜜・不起不生の法は全く說かれざるなり。從つて彼等に無（abhāva）等の自性を說くとも信じもせず行境ともならざる故に、外道或は究理論者の所造なりとする能はず。

（四）、又聲聞達かくの如く思惟せん。卽ち、この大乘は佛の所說にあらず。或る人が地（ブトガラ）・波羅蜜・不生不滅の義を現證して說けるものなりと。

それ故に答へて曰く。成就の故にと。果して然らば、この大乘は佛言なりと成就せらる。如何にしてか。地・波羅蜜・不生不滅の義を悟れる人こそ佛と稱せらる。彼によりて說かれし一切の語は佛言なる故に、この大乘は佛言なりと成就せらる。

（五）・（六）、「有と無なれば有無なる故に」と云ふ複合詞は「有なるときには有にして無なるときには無なり」と分解せらる。聲聞分別すらく。世尊は聲聞乘獨覺乘大乘の三乘を說き給ひしや否や。曰く、大乘を說き給へり。有なりや。曰く、〔有なりと。答へて曰く。〕既に何らかの大乘有なるときは、爾らばこの般若波羅蜜等こそ大乘なる故に佛言なりと成就せらる。この大乘を外にして聲聞獨覺外道等の諸法を直ちに大乘なりとするは不合理なればなり。何故に不合理なるかは後に詳しく說くべし。

若し聲聞達、三乘としては無なれども乘は一なり。同じ聲聞乘を諸の勝慧あるもの修するときは佛となり、諸の中慧あるもの修するときは獨覺となり、諸の劣慧あるもの修するときは聲聞となる。乘は一としてのみ有り三とし

ては無なりと云はんか。

答へて曰く。無なるときは無なりと。若し大乘無なるときは聲聞乘も亦無となる。何故なるか。成佛の道たる大乘無なるときは成佛することなし。成佛せざるときは劣乘をも說かざるを以て現在流行のこの劣乘も亦佛言とならざることとなるべし。

(七)、若し聲聞達かく思惟せん。卽ち、或る人の語を修習するとき煩惱の對治となる如き彼人の語は佛言なり。譬へば聲聞乘の如し。然るに、大乘を修習するときは煩惱の對治とならざる故に佛言ならずと。

答へて曰く。對治の故にと。大乘の修習は無分別智生ずる依處となる。既に無分別智生ぜんか、煩惱を斷ずる對治となる故に佛言なりと顯示さる。

(八)、若し聲聞達かく思惟せん。卽ち、佛言〔なる聲聞乘の經〕には蘊等の法有なりと說く。然るに、般若波羅蜜等の〔經〕中には一切法無なりと說く故に佛言ならずと。

答へて曰く。聲の外なる故にと。世尊、般若波羅蜜等〔の經〕に於いて無なりと說き給ふはすべて聲通りの義にはあらず。諸愚夫によりて所取能取として遍計執せられたる如きの自性の無なることを意趣して無なりと說けるも、依他・圓成の自性は無なるにあらず。それ故に聲通りに執して佛言ならずとするは不合理なり。」

非佛說の主張及び佛說の辯護は大凡かくの如きものである。而してこれら八の因故中、第八の因故は暫く之を措き、第五・六の因故が最も重要視せらるべきだと思ふ。それは、以下の第九・一〇・一三の三偈を以てこの二の因故が重ねて論證されてをり、他方、淸辯も亦これと同趣旨の辯護をなしてゐるからである。從つて聲聞側に於いては主とし

てこの點に關して非佛說を主張せるものの如く考へられる。

乃ち、安慧の紹介せる聲聞側の主張は、佛說として存するものは唯聲聞一乘のみであつて、根機の相異と修習の時間の長短とによつて三乘の別が生ずといふのである。卽ち、

「⑥この同じ聲聞乘を利根のもの修習するときは佛となり、中根のもの修習するときは獨覺となり、鈍根のもの修習するときは聲聞となる。」又

「⑦同じ聲聞乘を三無數劫の間修習するときは佛となり、百劫の間修習するときは獨覺となり、三生の間修習するときは聲聞となる。」

とする。上根のものがこの聲聞乘を三無數劫の間修習するときは、無上菩提を覺するのであるから、上根のものにとつては聲聞乘がそのまま成佛乘としての大乘たり得るのである。そこで、かくの如き意味に於ける大乘としての聲聞乘は佛說であるが、現在流行せる般若波羅蜜等の所謂大乘經なるものは佛說ではないと主張するのである。

次に淸辯は第三—六偈の註釋に於いて聲聞の主張を次の如くのべてゐる。卽ち、

「⑧八聖道は正等覺を得せしむとは聖敎の正理である。それ故に、諸佛世尊の菩提もこの道によりて證得するを得るなり。一切法の簡擇によつて覺するが菩提なり。彼〔菩提〕の體が菩提性なり。菩提性〔なる點に於いて菩提は何れも同一〕なる故に彼々の菩提はこの同じ道によりて現證せらるるけれども別な〔道〕によりて現證せらるるにあらず。聲聞の菩提の如し。聲聞の菩提が正見等の道によりて證得せらるる如く、佛の菩提も爾り。……

〔然れども〕世尊の信等の根は眞に利なれども、諸聲聞のは鈍、諸獨覺のは中なり。それ故に世尊は自ら一切智性と

なれども聲聞等のは然らず。……（同じ獨覺中にも部行喩・鱗角喩等の差別あり、聲聞中にも智慧第一の舍利弗等の所謂十六阿羅漢の差別あることを示し）……かくの如く智に差別あれども道には差異なし。世尊についても同樣に見らるべし。……この同じ〔八聖〕道のみが三菩提を得る因なれども、何らか別なる、この道より殊勝なる菩提の道はあるにあらず。」と。

その叙述の仕方の上に少しく相異があるけれども、この主張は安慧の提示せる如き聲聞乘卽佛乘說と同じである。卽ち、八聖道の修し方は同一であるけれども、法の簡擇卽ち、菩提の相違あるは智の差別に由來するのである。而して聲聞乘は八聖道を說き、所謂大乘はこれを說かない。それ故に、智の利なるものは聲聞乘所說の八聖道によつて一切智を得て成佛するが故に、聲聞乘は成佛乘なりと云ふことが出來、所謂大乘は八聖道より別な、より殊勝な修行道を說くが故に佛言たり得ない、といふ意味に解せらるるからである。

かくの如く兩者共に聲聞乘卽佛乘說を擧げてゐることであるから、これに基く非佛說說は大乘一般に向けられた相當有力なる主張であつたと考へられる。それ故に先づこれを非佛說主張の第一の型として置く。

次に、非佛說主張の第二の型と考へられるものは、莊嚴經論の第一一偈及びその註釋中に見出される。卽ち、[9]說時經(dus bstan-pḥai mdo sde-kālanirdeça-sūtra)、說大經(chen-po bstan-paḥi mdo sde-maḥānirdeça-sūtra)[10]中に佛言の相は「經中にも入り、律中にもあらはれ、法性とも相違せざるものは佛言なれども、それより他のものは佛言にあらず。」と說けり。その中、蘊・界・處等有なりとの敎說は經の相なり。然るに、大乘中には一切法は無自性なりと說く。それ故に、經中にも入らずして經に隨順せざるなり。七聚罪を說ける本典(grantha)は律なり。而

して律中には佛法僧無なりと語るときは罪となると說く。然るに、大乘中には佛無し法無し僧無しと說けり。それ故に、律中にもあらはれずして律に隨順せざるなり。無明に緣りて行あり等の順と無明滅するに緣りて行滅す等の逆との緣起は法性なりと說かれたるに、大乘中には一切法は不生不滅なりと說く。それ故に、法性とも相違す。それ故に大乘は佛言ならず。

と述べ、大乘の三藏はその教相が聲聞乘のそれと相違するが故に、換言せば、聲聞の三藏に攝せられざる故に、佛言ならずと主張するのである。淸辯も亦この同じ主張を

大乘は佛言にあらず。經律論に攝せられざるが故に。凡そ何ものにしても佛言なるものはすべて經律論にあらはるべきなり。然るに、大乘はその名すら經律論には得られない。それ故に佛言にあらざるなり。ヴェダーンタの見の如し。[12]

と述べてゐる。尙ほこの外に「大乘は佛の所說にあらず。十八部派內に屬せざるが故に。ヴェダーンタの見の如し。」[13]なる主張を擧げ、その十八部派內に屬せざる理由として「世尊の涅槃し給ひし時の根本結集によりても結集せられざりしが故に。又、後に〔教團〕分裂せしときの諸結集によりても結集せられざりしが故に。」[14]とのべてゐる。直前に提示した安慧の紹介せる主張は、その反駁より推察するときは、この十八部派內に屬せざるが故に佛言ならずとの主張をも內含せるものと考へられる。

先の非佛說主張の第一の型は大乘にのみ向けられた難論であると考へらるるが、この第二の型なる「非三藏なるが故に」[15]の因故は非佛說を云ふ場合の常套語なるべく、十八異部派の間にも常に用ひられてゐるのを見る。

③ 佛教研究第二卷第二號（一一七頁以下）の拙稿參照。

④ 第一八葉a—第二〇葉a。

⑤ この喩を淸辯の疏思擇焰には非佛說の一因故として述べ、その論破には「世尊迦葉に對してクリキ王が夢を尋ねたり。〔迦葉〕のたまへり。人壽百歲なるとき釋迦牟尼如來出世し給ふ。彼〔釋迦牟尼〕の敎說は十八部派に分裂すべし、と說き給ひし差別中に大乘は說かれざる〔が故に佛言にあらざる〕なり。と〔汝〕若し云へば、〔曰く。〕大乘は決定して甚深廣大を信解する有情の意樂と增上意樂とに關する限り十八部派中に共通に說かれてゐる。諸聖典（āgama）の敎說中に、生・世代・顏色・境・時異なることなし、と說けるが如し。或は又、一切佛の敎說には聲聞乘・獨覺乘・大乘の差別有り。されど、敎說別異の差別は釋迦牟尼のみに有れども他〔の佛〕には有らず。迷を除く佛（Krakucchanda）等の諸如來も亦乘を別異に差別し給ふこと有る故に、〔乘の差別は〕迦葉〔佛〕によりて說かれざるなり。それ故に、大乘は佛言にあらざるにあらず。」（第二〇五葉a—b）と述べられてある。安慧は記別の喩として用ひ、今淸辯のは喩として用ひたるにあらず、迦葉佛の記別なるクリキ王の夢の差別中に大乘なき故に佛言ならず、とするに對して、釋迦には敎說の差別はあつても、乘の差別はなき故に、迦葉佛によりて說かれざりしなり、となす點相違せり。而して安慧の釋には Kṛika とあれども、淸辯の疏及びチヤンドラ・ダースの藏英辭書によりて Kṛiki と訂正せらるべきである。その藏英辭書には Kṛiki; n. of a Buddhist king of Benares who is said to have patronized Buddha Kāśyapa. In the Chinese Version of the Vimala-kīrti-nirdeśa sūtra, he is called Kṛipin, the kind and merciful.

⑥ 第二一葉b。

⑦ 第二二葉a。

⑧ 第一五八葉b—第一六〇葉a。

⑨ 第二三葉b—第二四葉a。

⑩ この二經何れにあるや知らず。

⑪ 第一六〇葉a—b。

⑫ これに續いて、「而してヴェダーンタは恒河等の沐浴所に於いて沐浴し、斷食し、三界のマントラ等を誦することによりて罪を清めて解脫を得と說く。大乘者も亦 Gaṅgā, Sindhu, Pakṣu, Sītā の四河の水にて沐浴し飲み水中に住すといふ次第を以てダラニ・マントラの誦、誦念 (Jāpa) 等をなすによりて罪を滅し福を增長する等の別な道を說くが故に、ヴェダーンタの見の如しとなり。」といふ。

これに對して、第三五偈下の疏では、「そは然り。Gaṅgā, Sindhu, Pakṣu, Sītā の四河の水にて沐浴し飲み、水中に入り水中に住す等は菩薩の本願に關して說けども、水に罪等を清める能力あり〔と說く〕にあらず。……それらのことは善知識に攝受せられて成佛するのと相違あることなし。又斷食等は明呪 (Vidya) を行するときの身體等を清めて明呪を成就せんために說かれたりと雖も、解脫せんと欲するために說かれたるにあらず。されば如何にして別な道ならんや。」(第二〇六葉a—b) と駁し、更に、第五六偈下の疏には、「ヴェダーンタを喩として說くは所成の中に攝せらるる故に、所成は喩不成の過失あり。〔聲聞人〕然らず、殺生・不與取等の多くの惡說を語るヴェダーンタ支分は喩となる、と云はば、〔曰く、〕大乘中にはかくの如きを說かざる故に過失あるにあらず。實に大乘は三聖典の敎說とも相違せず、又、法性と相違する敎說もなし。先に成立せるが如し。凡そ佛の言敎と相違せざる、善說のヴェダーンタは攝らるべし。されど惡說は攝らるべからず。疑惑あるときは思擇すべし。されば正理は攝らるべし、不正理は攝らるべからず。」(第二一一葉b) と論じてゐる。

⑬ 第一六一葉a。

⑭ 第一六九葉a。

⑮ 宮本正尊氏「聲聞の學と佛・菩薩の學」(哲學雜誌第五五三號一七八頁等) 參照。宮本氏のこの論文は現代といふ夾雜性の下になれる「聲聞眞實決擇」といふべきものであり、これに先き立つ氏の「根本中の研究」を中心とする一群の論文は淸辯の「求眞實智章第三」に比せられ得るであらう。山口益先生の「入瑜伽行眞實決擇章第五」を中心として印度大乘佛敎を槪論・批評せられし「無と有との對論」と共に、學界への功績は眞に輝しいと考へられる。

(三)ノ一

先づ非佛說主張の第二の型に對して如何に反駁してゐるかを檢しよう。「經中にも入らず律中にもあらはれず法性とも相違するものは佛言にあらず」といふ場合、その權證標準となれる經律法性とは如何なるものであらうか。清辯[16]によれば、根本結集者大迦葉等の結集せるものは既に散逸して現存するものは、後に各部派に於いてその根本結集の際結集されし阿含の言教(tshig-gi-mdo)に基いて各別に結集せるものである。乃ち、各部派に於いて結集者が異なるから、從つて聲聞十八部派の經等は相互に相違してゐる現狀にあるといふのである。かくの如く既に聲聞乘一般に通じて權證となる如き經等は認められないから、微難の意は、相互に相違するが故に佛言ならずといふ意と、或る特定の部派のそれと相違するが故に佛言にあらずといふ意との兩意に考へられる。それ故に安慧も清辯も共にこの兩方面より反駁してゐる。

前者の意に對しては安慧[17]・清辯共に、啻に大乘が佛言ならざるのみならず一切の聲聞の本典(grantha)も佛言ならず、聲聞の本典も相互に相違してゐるからである。となし、安慧はその聲聞の本典の相互相違點二[18]をあげ、清辯は十種を擧げてゐる。

後者の場合ならば、既に各部派の經等は聲聞內に於いて相互に相違しつつ而かも各自所依の經中にも入り律中にもあらはれ法性とも相違せざるを以て佛言なりとなすのであるから、かかる意味に於いてならば、大乘も亦佛言なりとて、安慧[19]は

大乘も入楞伽・般若波羅蜜等の經と隨順するが故に自らの經中に入る。又煩惱を調伏するものを律といふ。而し

て菩薩の煩惱は有なり無なりと分別する分別にして、彼分別を斷ずる能對治なる無分別智も亦大乘の本典中に說かれてゐる故に自らの律中にもあらはる。又、菩薩の法性は廣大甚深なり。彼廣大甚深も大乘中に說く故に法性とも相違せざるが故に、大乘も佛言なり。

とのべ、清辯[20]は

十八部派はすべて各自の經等に入ると雖も相互に大なる相違あり。大乘も亦利他に關する甚深廣大の理趣(naya)のために聲聞の經等の三藏には全く入ることなしと雖も、〔自らの所依の〕大乘經にも入り、菩薩の七百學處にもあらはれ、空性として說かれた法性とも相違せざる故に佛言なり。

と反難してゐる。

以上の如きが安慧・清辯の駁論であるが、それは駁論と云つても聲聞乘と同じく大乘も佛說でもあり非佛說でもあるといふ程度の返難にすぎない。稍々論調の昂れるは清辯にあつては、根本結集及びそれ以後の諸結集に於いて大乘經の結集されざりしが故に佛言ならずとの徵難に對する次の如き論評、卽ち、ラマ[21]經その他多くの經文を引用して、世尊の涅槃して未だ久しからず阿難の在世せるときにも佛所說の法門の執持者なきため、根本結集には佛言が廣く集錄されてゐないと批判し、その根本結集に集錄されざりし法門の執持者こそ大乘の根本結集者であるとし、

大乘[22]は佛言なり。根本結集者である普賢・文殊・密迹力士・彌勒等によりて結集されしが故なり。吾等の根本結集者は聲聞にあらず、大乘の敎說は彼等聲聞の境にあらざるが故なり。

と大乘佛說を積極的に主張せるもの、更に、

世尊㉓涅槃し給うて未だ久しからざるに聲聞等各自に對する言教に執着せるために、結集者が力を盡して結集せるときにも、大乘の教說は法器となれるもの誰もなき故に誰によりても結集されざりしなり。〔それら大乘經は〕善逝をよろこぶ龍等によりて結集されて龍の世界等に入れり。

佛により て懸記されし聖龍樹はそれを求めてその法器となれるが故に彼等〔龍の世界等〕より〔大乘經を〕集めて人間世界に弘通せり。一切種智を得るに隨順せる大乘の教說は惡魔の行境にあらざる故に、それ故に大乘を長く誹謗し誹難するは不合理なり。慧を以て觀察する能力あれば彼々の正理を以てそのことを觀察すべし。

と論ぜるもの等である。安慧にあつては、先に譯出して示せる第二因故「同時に起れるが故に」に對する註釋の如きもの、更に、

聲聞㉔の一切部派の義を攝する本典こそ佛言なりとせば、爾らば各々異なる聲聞の部派中には一切の本典は攝せられず、却つて大乘中にこそ一切は攝せらるる故に、大乘こそ實に佛言たるなり。

と論ぜるもの等であるが、これらの論述とても敵者を充分說服し得る程のものとは考へられない。淸辯の辯護に見らるる如く、これを歷史的問題として佛說非佛說を論ずる場合には何れも佛說か非佛說かであつて、一が佛說にして他は非佛說なりとの論證は不可能であるといふのが眞相に近いと思はれる。

⑯ 第一八二葉aの取意。それを譯せば次の如し。

「根本結集者大迦葉等の阿羅漢の結集せるものは現在隱沒せり。異部派の聖教中には諸言教の建立異なるが故なり。彼等聖教の語の別樣に集められし經の語意を集めしものも亦異なつて誦せらるが故なり。又、別な經にして〔聲聞の三藏中に〕屬しも相違もせざるもの、卽ち、入胎〔經〕・有觀喜〔經〕・壽究竟〔經〕なる名のあるものも〔現に〕見らる。されば結果も惡しく行はれしを以て、かくの如き〔結集〕に佛言が廣く記錄されたりと如何にして信ずるを得んや。」

⑰ 安慧釋は第二四葉a。淸辯のは、第一八二葉b六・七行。

⑱ 安慧の示せる二種の相違點とは、「(一)說一切有部の本典中所說の空性經・正語經(yaṅ dag par smra baḷi mdo)を聖一切所貴部は佛言なりとは認めず。(二)說一切有部の本典中所說の中有〔經〕を大衆部は佛言ならずと破す。」(第二四葉a)。淸辯の十種相違とは、「(一)勝義空等の無我を具する經を聖一切所貴部は認めず。(二)七有を具する中有〔經〕等を化地部は認めず。(三)同樣に律についても犢子部は非時に糖塊(guḍa, 石蜜)を食する等の業を遮す。說一切有部は食し受用する業を認む(國譯一切經、律部十四、第一六九・一七〇頁註十四・十六參照。西本龍山氏の御指示を得たり。茲に謝意を表す)。(四)彼等〔犢子部〕の經中には我有りとのべ、說一切有部はこれを遮す。(五)或者は無我を說き、或者はプトガラを說く。(六)或者は一切有爲は一刹那なりと主張し、或者は二刹那なりと主張す。(七)或者はこの大地は劫を盡して住すと許す。(八)或者は涅槃は實有なりと許し(有部)、或者は唯名なりとす(經量部)。(九)或者は中有を許し(有部)、他は許さず(大衆部)。(十)或者は世尊による現觀は一刹那なりと許し(化地部・大衆部)、他は十六刹那なりと許す(有部)。かくの如く相違するが故に、異部派の諸敎說は種々なり。それ故に、〔聲聞の〕本典もしばらく〔佛言として〕成立し難し。從つて、異なる結集者によつて結集されざる點からすれば、大乘も佛の所說にあらざるなり。」(第一八二葉b)と。

⑲ 第二四葉b。

⑳ 第一七九葉b—第一八〇葉a。

㉑ ラマ經以下十四經(頌に出ずるもののみを謂ふ)を批評してゐる。ラマ經(bla maḥi mod sde)によるそれは次の如し。

「ラマ經中に、『天主帝釋は曰へり。大德師長よ、娑婆世界に安住せるあらん限りの世尊の聲聞の心を見るに、この法門を執持するものは大德師長よ汝を除いて一比丘もなし。大德師長よ、この法門は世尊によりて說かれし法門なる故に、汝は執持せよ。』と說かれてゐる。このことから推察せば、他〔經〕も亦その時〔執持者なき故に結集せられざりしなりと〕知るべきなり。世尊の涅槃して未だ久しからず聖阿難も存在せるときすら佛の敎說を好く知り又知り得るほどのものなきとき、況んや現在に於いておや」。(第一八〇葉a—b)。

㉒ 第一八〇葉a。 ㉓ 第二〇五葉b。 ㉔ 第二四葉b。

(三)ノ二

次に非佛說主張の第一の型に對する反駁に移る。第二の型に對する辯護は先述せる如く主として歷史的問題としてこれを扱へるに反して、第一の型に對するそれは教理上の問題としてこれを扱はんとするものである。

そこで、淸辯の反駁に於いて先づ注意せらるることは、彼㉕が正理 (yukti)を以て隨量(anumāna)すべきことを强調しその立場より駁してゐる點、卽ち、理長爲宗の立場よりせる點である。一般に論爭をする場合には經證(āgama)と共に理證(yukti)とを以てその主張の妥當性が判定せらるることではあるが、彼にあつては正理に契はざる聖教は聖教としての權威なきもの、非佛說であるとするところにその特徵が見らるる。乃ち、彼は先づ最初に、

> 聖教㉕と相違せず更に隨量に隨順する如きは眞實 (tattva)の修習である。そのことは同じく諸賢者によりても許さる。(第二二偈)

と提議する。凡そ修習が眞實であるためには單にそれが聖教に說かれてあるといふばかりでなく、更に正理に相應するものでなければならぬとする。それ故に聖教所說の修道といふものを正理を以て隨量せねばならぬ。卽ち、八聖道なるものが聖教に說かれてゐるからと云つても直ちにそれが眞實の修習であるといふことにはならないのである。だから聲聞乘にも大乘にも八聖道が說かれてあるとしても、それが卽同だとすることは出來ない。聲聞乘ではそれを如何に修習し、大乘では如何に修習するかを正理を以て檢する必要が生ずるわけである。彼㉕によれば、正理に相應した

修習とは不可得による修習であり、然らざるものは有執(bhāvābhiniveça; bhāvagrahaṇa; bhāvagrahaṇābhiniveça)による修習である。而して、正見等の道によりて正等菩提を得るとは諸賢者によりて許さるる故に今更に自分がそのことを說くのは已成を成する過失に墮する如くであるけれども、不可得の仕方で修習することを認めない他のもののために正理を以て觀察すべし、とて次の如く考察してゐる。その考察に入るに先き立ち、聲聞より大乘は八聖道を說かずそれ以外の道を說くといふのが徵難の一つであつたから、「一切智性[26]を得る道は、正見を首めとする〔八聖道なり〕と大乘中に說かれてゐる故に、それ故に〔汝の云ふ非佛說の〕因故は不成である。」(三十五偈)と大乘にも八聖道を說くとし、そこで八聖道修習の仕方は何れが正理に契へるかの考察に移る。

さて、聲聞[27]の聖敎中には四諦十六行相・三轉十二行相の觀法を說き、この觀法によつて解脫すと說くけれども、この聖敎は正理に相應せざるものと云はねばならぬ。元來生老病死等の苦は因緣所生なる故に自性として空・無である。それ故に、生等は苦を自性とするものであると云ふことは出來ない。聖敎中に「これは實に苦の聖諦なり。生も苦、老も苦、病も苦、死も苦」云々と說かれてあるのは世間の慣習(vyavahāra)に從つて假說せられたものにすぎない。卽ち唯名無實である。從つて唯名無實の苦を境として「これは苦の聖諦なり」と苦等を觀ずる正見は境なる苦をありのままに觀ぜるものではない。卽ち、如實智見(yathābhūta-jñāna-darçana)ではない。苦の行相を了得するからである。かくて、施設を文言通り有執する聲聞の正見等の道は第一義としては道諦たり得ない故に、正理と相應せざる傳承(āgama)である。

然るに、大乘にては苦等[28]を觀せざるを以て正見とする。觀[29]せざる故に苦の自性を增益・了得することなく、空・無

の體(dṅos-po med-pahi ṅo-bo-ñid-abhāvarūpatā)は一切時にそのままの姿に安住するのである。即ち、大乘の正見等の道は苦等の實相に契合する(tattva-prayukta)故に眞實智見(tattva-darçana)であり、第一義としての道諦であり、從つて正理に相應せる傳承である。以上の如く觀察して、

大乘は佛言ならずと言へる[30]を今決擇すべし。(第二三偈c—d)……正理に隨順する聖教と相違せざる故に大乘は佛の所說なり。隨量と相違するものはこれ佛の所說にあらず。譬へば斷見の如し。大乘は正理によりて害せられず。〔その〕正理は後に說くべし(以上の觀察)。それ故に大乘は實に佛の所說なり。獨覺乘の如し。

とて、聲聞乘は正理に相違せる聖教による故に非佛說なりと逆襲し、聲聞側の一々の徵難に對しては、

苦等[31]を如何なる行相を以ても畢竟じて觀ぜざるが解脫なり、と大乘のこの宗に於いて說かれてゐる。彼〔大乘の宗〕のこの觀せざる〔仕方による修習〕は唯觀法をする聲聞等の境にあらざる故に、前分所破に於いて「弟子の菩提の如し(第三偈)」との喩をとけるその喩もあることなし。又同じく、[32]道の修習は境として生ずる故に大師の一切智性は生ずれども、根の殊勝なるによりて生ずるにはあらず。それ故に、根の殊勝なる故に〔一切智あり(第四偈)〕との因不成なり。別な殊勝な道を說ける故に〔佛言にあらず〕との因も亦同樣に不成なり。……世俗諦に於いては正見等の行相の姿のままに修習せらるるけれども、眞實義(tattva)を證得する時には觀ずるなき等の行相として修習せらる。それ故に、この大乘に於ける修習は特別に說かれてゐるけれども、別な道ではない。それ故に、別な道を說示するが故に〔佛言ならず〕等の因は不成なり。

と回答してゐる。更に又、修習の時間の長短によつて三乘の別ありとの徵難に對しては、

諸[33]聖聲聞は唯觀法のみの現觀を有し、緣起を遍知するは諸獨覺なり。それは說かれし如くに道を有として修習するが故なり。然るに、世尊は不可得に安住するによりて〔正等〕菩提を證得するなり。彼〔世尊〕とても有執を根本より斷ぜざる間は〔正等菩提を證得〕せざる故に、それ故に、不可得の修習によりて正等菩提の因となり、殊勝なる聖道となれども、少時〔の間修習するによりて二乘の菩提を得るには〕あらず。

と駁してゐる。

清辯は以上の如く中觀派の論師なる故に、空・無の立場より不可得の修習を標準として上根のものと雖も有執の修習をする限り空・無の實相に契合することが出來ず、有執を根本より斷じて不可得に入れば一切智性を得る故に聲聞乘が卽ち成佛乘としての大乘たり得ないと反駁したのであるが、安慧は直ちにはかかる方法をとらないで、菩薩道と聲聞道との比較によつて反駁を試みてゐる。菩薩は人法二無我を體得せるが故に自と他との對立を認めず自他平等の立場に立つが故に、自利することがそのまま利他であり、自利の內容は全く利他となつてゐる。かくの如く自利利他を圓滿に行ずるが故に成佛することが出來るのである。然るに、聲聞は人無我法有と說く故に自と他とは對立せざるを得ぬ。それ故に各々自利のみを行ずるにすぎない。假令自利することが必然的に利他となつても、それは初めより自覺的に利他を行ずるものでないから眞の意味に於ける利他とはならない。このことは、聲聞側から、

「[34]自らの厭離と離貪と解脫との自利法を他人に說くときは他人も亦解脫するが故に利他となる。」

と反難するに對して、安慧がかかる聲聞の利他と大乘の利他との相[35]違點五つを擧げ、その第一の相違點として、

大乘に於いては自と他との涅槃のために發心すれども聲聞乘に於いては自の涅槃のために發心するが故に、意樂の相違あり。

とのべてゐることによつて理解せられる。意樂相違とは心構へ（āśaya）の相違と理解すべきで、結果に於いて同じく他を利することとなつても、その初發心時の心構へに於いて自利のみがその內容となつてゐるから、眞の意味に於ける利他と稱することが出來ないといふのである。華嚴經に所謂「初發心時便成正覺」を思へばこのことは好く理解せらるるであらう。更に又、淨土論註の他利利他の深義といへるものもこの理解を助けるものかと思はる。謂はば、大乘の利他は、因に於いて果の如何が決定せらるる（kāryeṇa kāraṇopacārataḥ）ものであるのに、聲聞は果に於いて因の如何が決定せらるる（kāraṇe kāryopacārataḥ）ものであるのに、聲聞は果に於いて因の如何が決定せらるる（kāryeṇa kāraṇopacārataḥ）考へを以て反難せるものと思はる。

かくの如く聲聞乘は徹底して自利のみを說くが故に福智の資糧も極めて少さく、從つて成佛の方便たり得ないのである。これに反し、大乘は自利利他を說き、福智の資糧も甚深廣大なる故に成佛の方便たり得るのである。このことを安慧は次の如く註釋してゐる。

㊱無上菩提を得る方便は二種なり。廣大の義と甚深の法となり。その中、地・波羅蜜・神通・力・無畏等は廣大の法なり。人と法との無我は甚深の法なり。或は又、福の資糧は廣大の法なり。智の資糧は甚深の法なり。その中、廣大の法を說く故に有情成熟あり。如來の功德なる大威力を聞いて信解するによりて有情善に入るが故なり。甚深の法を修習するが故に自ら無分別智を得るなり。かくの如く自利と利他となる甚深廣大の二法が此大乘中に說かるる故に、此大乘は無上菩提を得る方便なり。

以上の如く菩薩道と聲聞道との比較に據りて、成佛の方便ならざる聲聞乘を假令上根のものが長時の間修習するとも、無上菩提を得ることは出來ない。「角を久しく搾つても凝乳生せず、砂を久しく厭してもバター生ぜざるが如し」[37]と譬喩してゐる。それ故に、汝聲聞に於いて、何らかの成佛乘としての佛說大乘ありと許せば、そは、菩薩道を說く此大乘以外にはあり得ないから、此大乘は佛言であると反駁してゐる。

以上の安慧の所論は聲聞の徵難に對する直接の回答であるが、この外淸辯の理長爲宗の考察にも比すべき所論がある。それは先きの第二節の初に成宗品の第二部として分科せるところのものである。この第二部は第八の因故「聲の外なる故に」の廣說とも考へられ、大乘の所說を不如理作意せずして如理作意せば佛說非佛說の問題は自ら解決せらるることを論ぜるものである。而してその所論は大略次の如きものである。

如來は一切知者なれば說法し給ふ場合には一々の有情の心に隨順して、或者には有と說き、或者には空と說き、更にまた或者には有にもあらず無にもあらずと說き給ふ故に、如來の一切語は甚深微細にして何を意趣し給ふや實に解了し難きものである。卽ち、般若波羅蜜經中には多く空・無を說くと雖も大乘は空のみを說くのではない。他の經には蘊・界・處・地・波羅蜜等の種々なる法・種々なる道をも說く故に、空と說くには空と說かねばならぬ密意趣(saṁdhi)ありと思惟すべきである。又、空を解了せしめんために空の異門として不生不滅・本性空・無等を多くの大乘經中に說くを以て、その空には大用(mahāprayojana)ありと思惟すべきである。而してその密意趣・大用は長く隨入せる一切知者の智を得て初めて解了せらるるものである。從つて、この立場に於いてのみ大乘の佛說非佛說は論ぜらるべきである。(以上第一五・一六偈の意)

されば、佛說非佛說の問題を決擇せんとせば、一切知者の智を得べく、善知識に親近して「佛無し法無し僧無しと說かれしこの語は一切處に一切時に無なるを謂ふにあらずして、所取能取と諸愚夫によりて遍計執されし遍計所執の自性の無を意趣して無と說けるものなり。諸聖者の境なる依他・圓成の自性無なるにあらず。」と如理作意して初善・中善・後善の教說なる大乘法を聞思修すべきである。かくの如く佛說非佛說決擇の鍵は「所聞より他の力なし（na hi tasya (śrutād anyadbalam asti)。（以上第一七・一九・二〇偈の意）

然るに、これに反し惡知識に親近して空の異門を說き種々の法・種々の道を說く大乘經を未だ聞かず、空を文言通りに分別して「佛無し法無し僧無し等の語を一切處に一切時に無なり。」と不如理作意して大乘經を佛說にあらずして惡魔の所說なりと誹謗するときは墮惡趣等の大罪を得ることである。されば假令善知識に親近することを得ず、從つてその密意趣・大用を知らずとも、大乘經に對して敵意を生じて誹謗すべからず。敵意は自性罪（prakṛitisāvadya）であるからと誡めてゐる。（以上第一四・一八・二一偈の意）

以上第一・第二の型に對する反駁を通覽して考へらるることは、先にも一言せる如く第二の型に對する反駁は根據薄弱にして成立大乘の目的を充分果すことが出來なかつたと評することが出來よう。歷史的に見る限りこれに據つて成立大乘することは不可能といふべく、それは今日の學界の常識でもある。第一の型に對する反駁に於いては一は理長爲宗の立場から、不可得空修の成佛道として大乘を成立し、他は空・無を如理作意して依他・圓成の有宗として大乘を成立し得たものと云ふことが出來よう。

㉕ 彼のこの論證法は主として第二〇―二四偈の間にのべられてゐる。その大略を譯出せば次の如し。

「若し、教説中に極成せる正見等の諸道によりて正等菩提を得と説かれたり、と云へば、〔そは〕正しい。この同じ道を不可得の方法（naya）にて數習するによりて正等菩提は得らるべしと雖も、有執によりては（dnon po la mnon par shen pas）〔得らるるに〕あらず。彼不可得にての修習は如何。

見なく、思なく、語なく、業なく、命なく、勤なく、念なく、住なし。（二〇偈）

一切法は自體不成なる故に觀ずることなきがまさに正見なり。（中略）、過去の心は既に壞し、未來のは未だ生ぜず、現在のは生ずと雖も〔直ちに〕滅に現向す。それ故に、心は刹那性なれば平等住することあるにあらず。了得作用（upalabdhi）もこの同じき次第によりて不可得なる故に、心の住する義なし。而かも世俗の慣習（vyavahāra）に從つて正定なりと施設す。（中略）。

正見等の道によりて菩提を得とは已成を成立することとなるべし。〔されど今〕吾は正見等のこの道を分別して（pratinirdhāraṇa）〔不可得の修習を〕認めざる他のものに對して説くべし。既に〔不可得の方法にて〕道を數習せるものに對してはこの正理を以て觀察すべきことを説かざるなり。

爾らば、彼道を具するとき正理と相應せる修習たるや、或は然らずとせば如何にしてこれは正理と想應することとなるや。（anumāna）に隨順して聖教と相違せざることとなるが故に眞實義（tattva）を了得せるときに〔正理と相應するなり〕。若し、〔曰く、そは〕隨量汝の隨量に隨順するときは聖教と相違することとなる。と云へば、曰く。（茲に本文に示せる第二三偈を説く）。求眞實智に悟入し、寂靜と空と不二（advaya）と不可分二（advaidhīkāra）と自在（aparapratyaya）と不可得と等の相ある聖教と正理とに相違せずしで説かれたるものが眞實義なり、と吾の證明せるものが〔第二三偈に謂ふ〕眞實なり。修習の正理は直前に説けり（第二〇偈。（このことの聖教は、『文殊よ、一切法は平等（avisama）・不二・不可分二なりと觀ずるがこれ正見なり、（中略）文殊よ、一切法は自性として平等に住せりと觀ずるは、これ起作（ārambha）の散亂を了得せざる故に正定なり。八聖道はかくの如く見るべし。』云々と説悟入一切法經中に説けるものなり。（中略）かくの如く觀ずることなき

(adarśana) 相の修習はこれ別な道となすべからず。

この同じ道によりて〔正等菩提を得るなり〕と成立せらるると語らざるべからず。即ち、解脱に相應せざる不善法・邪見等を斷ずる能對治として正見等を如實に修習するなり。(中略)、されば、有執の執着(dios por ḥdsin pa la mnon par shen pa)を斷ぜんために、觀ずることなき等の修習を數習すべし。かくなすときは、一切法の眞實義を現前解することより自ら生ずる一刹那の不顚倒〔智〕によりて、習氣を具する相續を斷ずべし。所知の法を係念すること(prabandha)が習氣なれば、所知を了得せざるとを何に依りてか習氣生ずべし、とはこれ大乘に於ける次第なり。(中略)。

善逝の印定を具し(samādhi-vat)密意を具せる教説を如實に觀察せずして『牟尼はかくの如く説けり』と聲通りに執して執着説するものは、母の與へし飯丸子藥(laḍḍuka)を服用する子供の如く諸賢者によりて嗤はるるなり。

それ故に、聖教に隨順するのみならず正理を以て觀察すべし。その中、正理とはかくの如し。即ち、諸聖聲聞は觀法のみの現觀を有し、緣起を遍知するは諸獨覺なり。それは説かれし如くに道を有として修習するが故なり。然るに、世尊は不可得に安住するによりて〔正等〕菩提を證得するなり。彼〔世尊〕とても有執を根本より斷ぜざる間は〔正等菩提を證得〕せざるが故に、それ故に、不可得の修習によりて正等菩提の因となり、殊勝なる聖道となれども少時〔の間修習するによりて二乘の菩提を得るには〕あらず。

大乘は佛ならずと言へるを〔今〕決擇すべし(二三偈c—d)。

決定を生ぜしめて化導し義を悟了せしむるが決擇なり。そは如何。正理に隨順する聖教と相違せざる故に大乘は佛の所説なり。隨量と相違するものはこれ佛の所説にあらず。譬へば斷見の如し。大乘は正理によりて害せられず。正理は後に説くべし(三六—五五偈)。それ故に大乘は實に佛の所説なり。獨覺乘の如し。

復た

先に説けるこの道は佛の菩提を得る能はず、苦の行相を觀ずるが故なり。獨覺乘の如し(二四偈)。

觀ずることなき修習等を離れて、とは言外の餘意なり。苦等の行相は、苦の行相にして無常苦空無我が苦の四行相なり。同

樣に集滅道の諸行相も亦經中所説の如く各別に觀察すべし。或は又、苦・集・滅・道と所遍知・所斷・所證・所修と已遍知・已斷・已證・已修となる(三轉)十二行相を觀ずるなり。獨覺の道の如し。世尊は實に苦等の諸行相を不可得として平等に證得すとの意樂なり。」(第一七二葉a―一七五葉b)。尙ほ、山口益先生著「無と有との對論」一六五―一七六頁參照。

㉖ 第二〇六葉a。

㉗ 主として第三六偈・第三九・第四〇偈の疏による。(第二〇七葉a―b)。

㉘ 註㉕參照。

㉙ 主として第五〇偈下の疏による。「有執せる汝の聲聞乘所説の如き道の修習を吾の觀察せる次第によれば、それら(道の修習)は正見等の行相としては大乘に於いて正理にあらず。(大乘に於いては)苦等を觀ずることなき修習が正理なるが故なり。所以は、觀ずること――苦等の自體を圓滿せざること、によりて觀ぜられざるもの(rūpa)とは無の體なり。そは一切時に――一切時にそれ(無の體)の相が――そのままに安住せるなり。(第二〇九葉b―第二一〇葉a)。

㉚ 註㉕參照。

㉛ 第五三・五四偈下の疏(第二一〇葉b)。

㉜ 「道の修習は境として生ずる故に lam bsgom pa yul du byuṅ bas」とは實相に契へる(tattvaprayukta)との意味なりと解すべきであらうか。

㉝ 註㉕參照。

㉞ 第二一葉b。尙ほ、「自らの厭離・離貪・解脫」とは安慧の釋によれば四諦十六行相の觀法によつて解脫することである。卽ち、

「厭離とは苦諦に於いて無常・苦・空・無我と觀ずる故に意の厭離するなり。離貪とは集諦に於いて集・因・緣・生と觀ずる故に、一切煩惱を斷ずるなり。解脫とは道諦を修習して滅を現證することが解脫なり。」(第二二葉b)。

㉟ 五種の相違とは意樂(āśaya)・教説(upade(a)・加行(prayoga)・住持(upastambha)・時(kāla)との相違にして第二以下の相違

について次の如く釋してゐる。即ち、

「大乘の本典中には自と他との利益をなす法を說けども、聲聞乘中には自利をなす法のみを說く故に教說相違せり。大乘に悟入せる諸菩薩は自利と利他との二に加行すれども、聲聞乘に悟入せる人は自利のみに加行する故に加行相違せり。諸菩薩の智の資糧は虛空界の如く遍滿し、福の資糧は四方の海水の如く積集せり。然るに、諸聲聞は人無我のみを悟了する故に、智の資糧は昆虫に蠶食されし介子の種子の中の虛空の擴がりに止まり、且つ一握量の食物を與へるのみなる故に福の資糧は牡牛の後蹄(跡に殘れる)水量ほど積集せるのみなり。それ故に住持相違せり。諸の大乘に悟入せる(菩薩)は三無數劫の間に無上菩提を覺するも、諸聲聞は唯三生の間に阿羅漢果を得る故に、時相違せり。」(第二三葉a—b)。

㊱ 第二五葉b—第二六葉a。

㊲ 第二二葉a。